



# 動物

《犬》は、動物の代表。変形して《豸(けものへん)》となり、さまざまに、けものを表す漢字を生み出す。また、《牛》《馬》《羊》などを部首とする漢字には、それぞれの動物が人間とどのように関わってきたかが、よく現れている。さらには《鳥》《魚》《虫》《龍》などなど、さまざま動物たちが部首となる中で、《貝》は、経済的な価値を表す部首となって、異彩を放っている。

## 犬

〔名称〕いぬ

〔意味〕①犬 ②犬を使って狩りをする ③犬の肉

けこう  
抽象的ですねえ！

動物を表す漢字の多くは、その動物の絵から生まれている。その中でも、古くから人間に近しかった動物ほど、漢字としては簡略化され、絵文字を脱している傾向がある。

## だまむ

【犬】はその代表的な例で、古代文字を古い順に並べると、図のようになる。右の形では絵文字らしかったものが、真ん中では簡略化され、さらに九〇度回転したのが左の形。「牛」や「羊」もそうだが、「馬」「鳥」「魚」などが現在でも、絵の雰囲気を残しているのに比べると、簡略化の度合いが高い。

《犬》は、そのままの形で部首となる場合は、漢字の右側に位置していることが多い。一方、漢字の左側、「へん」と呼ばれる場所に置かれたときには、変形して《豸(けものへん)》(次項)となる。漢和辞典では、《豸》の漢字も部首《犬》の中に含めて扱うのがふつうだが、最近では《豸》を別立てにしている辞書もある。

部首としても、犬を意味するのが基本。【獸】は、以前は【獸】と書くのが正式で、本来は、犬を使ってつかまえた動物を指す。また、現在ではまず使われないが、犬が群れになって走ることを表す【森】という漢字もある。狩りで獲物を追いかけているのだからか。

これらに、《豸》に属する「狩」「獵」「獲」などを合わせて考えると、漢字を生み出した人びとにとっては、犬といえど、まずは、狩りの際に役立つ動物であったことがうかがえる。

と同時に、古代の中国では、犬は貴重な食用の動物でも

あったようである。それを示すのが、「献<sup>けん</sup>上<sup>じょう</sup>」の【献<sup>けん</sup>】で、以前は【献<sup>けん</sup>】と書くのが正式。「虜<sup>げん</sup>」は蒸し器の一種を表す漢字なので、「献<sup>けん</sup>／献<sup>けん</sup>」の本来の意味は、犬の肉を蒸して神にささげることだったと考えられている。

また、【献<sup>けん</sup>】は、先を見通した考えを指す漢字。もともとは犬の肉と壺に入れた酒とをささげて、神のお告げを得ようとするという意味だったらしい。めったにお目にかからないが、「遠<sup>えん</sup>献<sup>けん</sup>」帝<sup>てい</sup>献<sup>けん</sup>といった熟語があるほか、徳川三代将軍の家光が死後に贈られた院号を「大<sup>たい</sup>献<sup>けん</sup>院<sup>いん</sup>」という。このほか、「状<sup>じょう</sup>態<sup>たい</sup>」の【状<sup>じょう</sup>】は、以前は【状<sup>じょう</sup>】と書くのが正式。もともとは、犬の姿を表すという説が有力だが、ちよつと眉につばをつけたくならないでもない。かといって、ほかに説得力のある説も見当たらないのが、困ったところである。

# 彡

「名称」けものへん  
「意味」①犬 ②犬を使って狩りをする ③犬がほえる ④けもの ⑤人間としてふさわしくない 行動 ⑥その他

二匹が出えは必ず吠える？

部首【犬】(前項)が漢字の左側、いわゆる「へん」の位置に置かれたときの形。漢和辞典では《犬》の中に入れて扱うのがふつう。《彡》は3画だが、漢和辞典の部首配列では4画の《犬》のところに一緒になっているので、注意が必要である。ただし、最近では《彡》

を独立させて扱う辞書もある。

基本的には《犬》と同じだが、漢字の数は《彡》の方がはるかに多いので、そのぶん、部首として表す意味も広がりを持つ。とはいえ、基本となる意味は、もちろん「犬」。【狗<sup>くわう</sup>】がその代表で、「いぬ」と訓読みして使われるほか、「走<sup>そう</sup>狗<sup>くわう</sup>」とは、使い走り<sup>しし</sup>を指す。また、【狃<sup>ちゆう</sup>】は犬の種類だが、本来は中国の周辺部に住む異民族を指す漢字。犬の種類<sup>しん</sup>の「ちん」に対して用いるのは、日本語独自の用法である。

《犬》と同じように、「犬」を使って狩りをする<sup>しゅう</sup>ことに関係する漢字も含まれる。「狩<sup>しゅう</sup>獵<sup>りやく</sup>」という熟語で使う【狩<sup>しゅう</sup>】【獵<sup>りやく</sup>】がその例。「獲<sup>かく</sup>得<sup>とく</sup>」の【獲<sup>かく</sup>】も、本来は狩りをしてつかまえることを表す。なお、「獵<sup>りやく</sup>」は、以前は【獵<sup>りやく</sup>】と書くのが正式であった。

また、「犬がほえる」ことを表す場合もある。現在ではまず用いられないが、【吠<sup>び</sup>】は二匹の犬がほえ合う<sup>び</sup>という意味。これに「言<sup>げん</sup>」を加えたのが【獄<sup>ごく</sup>】で、原告と被告が言い争<sup>い</sup>うこと、つまり「裁判<sup>さいばん</sup>」を表すのがそもそもその意味。ただし、この場合の二匹の犬は「裁判<sup>さいばん</sup>」の場にささげられるいけにえの犬<sup>いぬ</sup>だとする説もある。

足は四本  
毛皮がご自慢!

以上は「犬」と直接に関係する意味を持つ漢字。《彡》はそこから発展して、【狐<sup>こ</sup>】【狸<sup>り</sup>】【猪<sup>ちゆう</sup>】【狼<sup>らう</sup>】などの哺乳類を指す漢字をも生み出している。「猪<sup>ちゆう</sup>」は、以前は、正式には「者<sup>しや</sup>」に点を加えた



## 動物

【狙<sup>いのし</sup>】と書いた。

とはいえ、漢字が生まれた当時には、現在のような動物学的な分類があったわけではない。だから、《彡》が表すのは、四本脚で歩き、体が毛におおわれた動物、つまりけものだと考えるべきだろう。

実は、《彡》の大半を占めるのはこのタイプの漢字で、部首として「けものへん」と呼ばれるのも、そのためである。ちよつと変わったところでは【獾<sup>かむろ</sup>】なんてのも、四本脚で毛皮が目立つ。また、ふつうは【獅子<sup>かむろ</sup>】の形で使う【獅<sup>かむろ</sup>】は、もちろんライオンンのことである。

【狛犬<sup>かむろ</sup>】の【狛<sup>かむろ</sup>】は、オオカミに似た動物だというのが、神社の石像を見る限りでは、想像上の動物だろうと思われる。「狼<sup>かむろ</sup>」という熟語で使う【狼<sup>かむろ</sup>】もオオカミの一種だが、これが、実在するとは思えない。ものの本によると、「狼<sup>かむろ</sup>」は後ろ足が短く、「狼<sup>かむろ</sup>」は前足が短い。そのため、両者はいつも支え合っていて、離れるとあたふたする。そこで、慌てることを「狼<sup>かむろ</sup>」というらしい。

同様に、【獾<sup>かむろ</sup>】も、本来は、夢を食べるという想像上の動物。現実には存在する動物「バク」は、後になってこの漢字で表されるようになったものである。

このほか、【サル<sup>かむろ</sup>】を表す漢字がまとまって含まれているのも、注目される。【猿<sup>かむろ</sup>】のほか、現在ではあまり用いられないが、【猻<sup>かむろ</sup>】もサル的一种だし、「狙<sup>かむろ</sup>」と訓読みする

【狙<sup>かむろ</sup>】も、本来はサルの一種を指す。「狒<sup>かむろ</sup>々」や「猩<sup>かむろ</sup>々」のように用いる【狒<sup>かむろ</sup>】【猩<sup>かむろ</sup>】も同じだが、もともとはどちらも想像上の動物で、後になって実在の動物を指して用いられるようになった。

なにはともあれ、「犬<sup>かむろ</sup>狼<sup>かむろ</sup>の仲<sup>かむろ</sup>」とはいいうものの、漢字の世界では犬とサルは仲良く同居しているわけである。

なお、《彡》の漢字の中には、《彡(むじなへん)》(p.236)でも書かれるものも多い。「猫<sup>かむろ</sup>」は大昔には【猫<sup>かむろ</sup>】と書いたし、「狸<sup>かむろ</sup>」も【狸<sup>かむろ</sup>】と書いた。また、「獾<sup>かむろ</sup>」は【獾<sup>かむろ</sup>】とも書かれる。

アリステレスの先輩かも！

こうやって眺めてみると、《彡》で表される動物は、みんな、人間に比較的近い。それだけに、逆に人間との違いを意識させる存在でもある。部首《彡》が人間としてふさわしくない行動を表すことにもなるのは、そのためだろう。

その代表的な例は、「犯<sup>かむろ</sup>罪<sup>かむろ</sup>」の【犯<sup>かむろ</sup>】。「狡<sup>かむろ</sup>猾<sup>かむろ</sup>」の【狡<sup>かむろ</sup>】【猾<sup>かむろ</sup>】は、どちらも「ずる賢い」こと。【狙<sup>かむろ</sup>】も似たような意味で、「老<sup>かむろ</sup>猾<sup>かむろ</sup>」とは「世慣れしていてずる賢い」ことをいう。

「猜<sup>かむろ</sup>疑<sup>かむろ</sup>心<sup>かむろ</sup>」の【猜<sup>かむろ</sup>】は「疑り深い」こと。「猛烈<sup>かむろ</sup>」の【猛<sup>かむろ</sup>】は、本来は「暴力的な」という意味。「獯<sup>かむろ</sup>猛<sup>かむろ</sup>」の【獯<sup>かむろ</sup>】は、「意地が悪い」こと。【狙<sup>かむろ</sup>】は「片意地な」という意味を表す漢字で、「狙<sup>かむろ</sup>介<sup>かむろ</sup>」とは「片意地で人付き合いがよくない」ことをいう。「狎<sup>かむろ</sup>れる」と訓読みする【狎<sup>かむろ</sup>】は、逆に「礼儀をわきまをせずになれなくすることを表す。

このように見てくると、《彘》の漢字には、社会の秩序を乱すものが多い。それがよく現れているのが「猥雑」の「猥」で、秩序立っていないという意味。「狂う」と訓読みする「狂」も、いろいろな意味で秩序が失われていることをいう。

そのような社会の乱れが極端になった状態を表すのが「猖」で、「伝染病が猖獗を極める」のように用いられる。「人間は社会的動物である」といつたのは、古代ギリシヤの哲学者アリストテレスだが、漢字を創った人々も、同じようなことを考えていたようである。

以上のほか、成り立ちがはっきりせず、《彘》の意味合いもよくわからない漢字もある。たとえば、「獨立」の「獨」は、以前は「獨」と書くのが正式。「蜀」(P246)は「幼虫」を表すことから、「獨」の本来の意味には「一匹でいる虫」動かない虫などの説がある。

また、「狭い」と訓読みする「狭」は、以前は「狹」と書くのが正式。「夾」(P24)に「挟む」という意味があるので、「狭」はもともと「両側から挟まれることだ」ともいうが、心がせまいことや、けもの道などを指すなどの説もある。

なお、「猶予」の「猶」は、以前は「猶」と書くのが正式。もともとは「獸」(P25)と読み方も意味も同じ漢字だったのが、当て字的に用いられて「まだしない」という意味で使われるようになった、と考える説が優勢である。

## 動物

# 牛

「名称」うし、うしへん

「意味」①牛 ②牛の行動 ③家畜としての牛

毛ウ一本、  
欲しいよなあ…

動物を表す漢字には、その動物の全体像の絵から生まれたものが多い。その中で、「生」は、「羊」とともに例外的な存在。古代文字では図のように書き、牛の顔を正面から見た形。かなり簡略化されているが、二本の角が、雰囲気をよく伝えて



いる。現在の形では左側の角がなくなってしまう。かつて、牛も残念がっているかもしれない。

部首《牛》は、牛に関係する意味を表す。部首としても「うし」と呼ばれるが、漢字の左側、いわゆる「へん」の位置に現れることが多く、その場合は「うしへん」ともいう。

「牡」は「オスの牛」、【牝】は「メスの牛」。どちらも、現在では「牡馬」「牝馬」のように、牛以外についても用いられる。

【特】は、本来は「大きなオスの牛」のこと。目立つところから「特別」のような意味が生じた。また、【犢】は「子牛」を指す漢字。「犢鼻褌」とは「褌の一種」で、使った経験はないが、締めると子牛の鼻のように見えるものらしい。

このほか、【犀】に《牛》が付いているのは、サイも牛の一種だと考えられたからだろう。ちなみに、【聲】は動物の「ヤク」を指す漢字。訓読みでは「からうし」と読む。



転じて、牛の行動を表すこともある。【犇】は、本来は牛が群れになって走るという意味だが、日本では「犇めく」と訓読みして使われる。【牴】は、牛が角をぶつけ合うこと。「牴触」という熟語があるが、現在では「抵触」と書くのがふつうである。また、人名や地名で見かける【牟】は、意味のはっきりしない漢字で、もともと牛が鳴く声の擬音語だったと考えられている。

**いつもいつも  
ありがと〜**

ところで、部首【牛】の漢字の中で最も多  
いのは、家畜としての牛に関係する漢  
字である。「放牧」の【牧】は、牛を飼うこと。「牢屋」の  
【牢】も、部首は《宀(うかんむり)》《尸》ではなく《牛》で、本  
来の意味は牛を飼っておく建物である。

「牽引」の【牽】は、牛に荷物を引っ張らせること。【犁】  
は「すき」と訓読みする漢字で、牛に引かせて農地を耕す  
道具。こうやって並べてみると、牛がいかに家畜として  
役立ってきたかがよくわかる。

ちなみに、芥川龍之介の小説『蜘蛛の糸』の主人公は「犍  
陀多」というが、【犍】は牛を去勢することを表す。

牛は重要な家畜ではあるが、同時に高級な食材でもある。  
そのことは、今も昔も変わらないらしい。大昔の中国では、  
しばしば、神への供えものとしても用いられた。「犠牲」  
の【牲】がその例で、どちらもいけにえという意味。  
また、牛肉は元氣回復の最高のプレゼントでもあったよう

で、「犗」は、「犗う」と訓読みする。なお、「犧」は、以前  
は【犧】と書くのが正式であった。

最後に、【物】の本来の意味は、よくわからない。ただ、  
さまざまな「物」を広く表すこの漢字に《牛》が付いている  
ことは、牛の重要性を反映しているのだと思われる。

# 馬

**すごいやつも  
いるけれど〜**

「名称」うま、うまへん  
「意味」①馬 ②馬が走る ③馬に乗る ④落ち着  
かない  
言うまでもなく、【馬】は動物のウマを  
指す漢字。古代文字では図のように書き、



かなり写実的。特に、長い顔とたてがみには、  
馬の鬃開きがよく現れている。部首としては単  
に「うま」と呼ばれることもあるが、漢字の左側、  
いわゆる「へん」の位置に置かれることが多く、その場合に  
は「うまへん」ともいう。

部首【馬】には、さまざまな馬を表す漢字が含まれる。  
【駒】は、本来は若くて元氣な馬のこと。日本語では「こま」と訓読みして、広く馬一般を指して用いられる。「駿馬」の【駿】は、速く走るすぐれた馬。【驍】もすぐれた馬で、「驍将」とはすぐれた武将を指す。すぐれた馬を意味する漢字には【驥】もあり、「驥尾に付す」とはすぐれた人にくっついて行動することをいう。

逆に、特にすぐれてはいない平凡な馬を指す漢字としては、「駄目」の【駄】が代表的。【驚】は能力の劣る馬で、「驚才」驚鈍」といった熟語がある。また、「春風駘蕩」とは、のんびりしていて細かいことは気にしないことをいう四字熟語だが、【駘】も、本来は走るのが遅い馬を表す。

このほか、「反駁」の【駁】は、本来は毛の色が入り乱れている馬。乱すところから、非難するとか、反論するという意味になったらしい。また、地名の「飛驒」に使われている【驒】は、本来は黒い毛に、細かい白いぶちが入った馬のこと。ほかにも、いろいろな毛の色の馬を指す漢字があり、たとえば【驪】は黒一色の馬を、【騊】は地の色の中に白い毛が混じっている馬をいう。

なお、「驢馬」の【驢】や「駱駝」の【駝】にも【馬】が付いているのは、もちろん、クロバやラクダも馬の仲間だと考えられたからだろう。

ひらりとまたがり  
突つ走る！

ところで、馬は古くから、乗り物として使われてきた。そこで、《馬》の漢字の中にも、馬が走ることや馬に乗ることを表すものが非常に多い。

【駆】は、以前は【驅】と書くのが正式。馬が走ることから転じて、広く走ることを指して用いられる。「疾駆」【駈け足】などがその例。【駈】は【駆】と読み方も意味も同じ漢字。ほぼ同じ意味の漢字は多く、「馳せる」と訓読みする

【馳】もその一つ。【驟】もその例で、「驟雨」とは速く通り過ぎていく雨つまりにわか雨のこと。現在ではあまり使われないが、【驥】も似たような意味で、「駈々」とはものごとや時間がすばやく進むようすをいう。

形からするとちよつと意外かもしれないが、「沸騰」の【騰】も、以前は【騰】と書くのが正式で、《馬》を部首とする漢字。もともとは馬が跳ね上がることを表す。「驀進」の【驀】の部首も《馬》で、本来は馬がまっしぐらに突き進むという意味。ちなみに、【驢】は二頭の馬が並んで走ることで、【羴】は馬が群れになって走ることだという。

一方、馬に乗ることに関係する漢字としては、「騎馬」の【騎】が代表的な例。「馴らす」と訓読みする【馴】は、本来は乗れるように馬をしつけること。【馭】は、そもそも馬をうまく操るという意味。「馭者」「制馭」のように用いるが、現在では「御者」「制御」と書くことが多い。「駐車」の【駐】は、もともとは乗り物としての馬を立ち止まらせること。

【駕】は、本来は馬車の本体に馬をつなぐことを表し、転じて、乗り物に乗ることや乗り物そのものを指すようになった。「駕籠」は、乗り物のかごのこと。二文字合わせて「かご」と読むので、「駕」に「か」という訓読みがあるわけではない。ついでながら、【駟】は四頭立ての馬車。三頭立ての馬車を指す【駟】という漢字もある。



## 動物

昔の街道沿いの町には、馬を休ませたり、乗り換えたりする場所があった。そんな宿場を指すのが「駅」で、以前は正式には「驛」と書いた。鉄道が発着する施設を指して用いるのは、日本語独自の用法である。

なお、「経験」の「驗」は、以前は「驗」と書くのが正式。成り立ちには諸説があるが、これも実際に馬に乗ってみることと関係すると考えるのが、わかりやすそうである。

以上のように、馬は役立つ乗り物だが、乗りこなすのはむずかしい。部首《馬》の中に、落ち着かないことを表す漢字が含まれているのは、そこに関係しているのだろう。

「驚く」と訓読みする「驚」が、そのわかりやすい例。「駭く」と訓読みする「駭」は、以前は「駭」と書くのが正式で、本来は「蚤」に刺された馬が暴れることだという。また、「世間を震駭させる」のように用いる「駭」も、びっくりする」という意味である。

さらには、「駭る」と訓読みする「驕」も、他人を見下す」という意味だから、本来は「馬が言うことをきかない」ことに由来するか。「騙す」と訓読みする「騙」も、その延長線上にあるのかもしれない。「罵る」と訓読みする「罵」にもそんな匂いが感じ取れないでもないが、この漢字は、部首《四（あみがしら）》(P133)に分類するのがふつうである。

こういった漢字には、人間の「馬」に対する微妙な思いが表れているようで、おもしろい。犬や牛、羊などに比べて、

馬はなかなか手のかかる動物のようである。

# 羊

「名称」ひつじ、ひつじへん  
「意味」羊

たくさんいるのは  
当たり前

動物を表す漢字には、動物を横から見、正面から見たものは少ない。「羊」はその少ない方の例で、古代文字では図のような形。「牛」(P227)の古代文字とよく似ているが、角が巻いているところが特徴的。「牛」の古代文字と同じくらいに簡略化された形になっているのは、羊がかなり古くから家畜化されていたことの現れだと思われる。

部首としても「ひつじ」と呼ばれるが、漢字の左側、「へん」と呼ばれる場所に置かれた場合には、特に「ひつじへん」ということもある。また、漢字の上部に現れるときには《主》(次項)という形になる。ただし、この形だけを特別に指す呼び方はなく、漢和辞典では、《主》の漢字も《羊》に含めて扱うのが一般的である。

部首《羊》の基本となるのは、もちろん、さまざまな羊を表す漢字だが、現在でも使われるものはほとんどない。「羴」は子羊を指す漢字。「羴」はオスの羊。メスの羊を指す漢字としては「羴」があるが、この字はなぜか部首《艹

(しょうへん)《p.128》に分類されている。

また、【**羚**】は「カモシカ」を指す漢字で、「**羚羊**」の二文字を合わせて「かもしか」と読むことがある。《**羊**》が付いているのは、羊と同じく、毛を織物にするからかと思われる。

このほか、「**群**れる」と訓読みする【**群**】に《**羊**》が付いているのは、何匹もかたまつて行動しがちな羊の習性をよく表している。ちなみに、「**焱**」(p.224)【**焱**】(p.228)【**焱**】(p.229)は、どれも「群れになつて走る」という意味を持つているが、【**善**】は「生臭い」ことを表す。羊が群れになるのは当たり前すぎるのだらうか。と同時に、羊の群れの臭いは、それだけ強烈なのだらう。

なお、「**飛翔**」の「**翔**」は「羽を広げて飛ぶ」という意味なので、部首【**羽**】(p.255)に分類されている。

以上、数は少ないが、《**羊**》が部首となること自体に、大昔の中国では「羊」がとても身近で、大切なものだったことが現れている。明治に入るまで羊を飼育することがなかった日本では、生み出せなかつた部首である。

# 羊

「名称」ひつじ

「意味」①食材としての羊 ②おいしい料理 ③その他

思わずよだれが  
出てしまう？

《**羊**》(前項)が、漢字の上部、「かんむり」か「しら」などと呼ばれる位置に置かれたと

きの形。ただし、特別に「ひつじかんむり」「ひつじがしら」などと呼ぶ習慣はなく、漢和辞典では、《**羊**》の漢字も部首《**羊**》の中に含めて扱うのがふつうである。

牛と同じように、羊も高級な食材であり、神へのお供えとして用いられた。《**羊**》には、そこから生まれた「食材としての羊」を表す漢字が多い。

「**美**しい」と訓読みする【**美**】は、もともと「お供えの羊が立派である」という意味。また、「**正義**」の【**義**】のそもその意味は、「お供えの羊の肉がきちんと切り分けられていることだった」と考えられている。

転じて、広く「食材」を表すこともある。【**羹**】は、「肉や野菜などのスープのこと」。「**羊羹**」は、本来は「羊のスープ」で、和菓子的一种を表すのは日本語独自の用法である。

なお、【**羔**】は「子羊」を表す漢字だが、「**羹**」から推測すると、本来はおいしい「子羊の肉」を指していたのかもしれない。そう思わせるほどに、《**羊**》の漢字は「おいしい食材」というイメージが強い。

そのことをよく表しているのが、「**羨**ましい」と訓読みする【**羨**】。本来は、「おいしそうな料理を、食べたいなあ」と思いつつ見ていることをいう。逆に、「ごちそうを他人にすすめる」ことを表すのが【**羞**】。現在では「**羞**じる」(含「羞」)のように用いられるが、このように意味が変化した経緯については、諸説あってよくわからない。